

教会は常に

先端メディアを活用

*ホームページやメールの利用、フェイスブック、ツイッターなど、インターネットの利用がすごい勢いで広がっています

私が九〇年代にホームページを立ち上げたころは、まだまだ一部の人の利用でしたが、今や若者だけでなく高齢者も利用するようになってきました。すでに多くの人のとって、ネット上に情報がないということは、「存在しない」と同義語になっています。目の前に教会があっても、ネットの検索に

引っかからなければ「存在しない」も同然なのです。それだけネットの情報が重みを持つようになってきているというわけです。これは教会としても早く対応しなければいけません。

*教会の取り組みが遅れているという声をよく聞きますが、実際はどうですか

確かにそういう面はありますが、全部が遅れているというわけではありません。比較的早い時期から取り組んでいる団体・教会・個人もたくさんいます。

もともと歴史的に教会はこのようなメ

ディアの利用についてかなり先駆的な役割を担ってきました。ラジオやテレビが普及し始めた早い時期に、これらを宣教のために活用しました。インターネット利用も、アメリカや韓国のメガチャーチはもちろん、日本にもリアルタイムで礼拝の説教をネット配信している教会があります。

こうしたメディアの利用は今に始まったことではなく、たとえば初代教会時代は手紙を回覧したり筆写したりして福音を広く伝えました。パピルスや羊皮紙という当時のメディアを使って。また聖画も立派な伝達手段でした。文字を読むことのできる人が少なかった時代には、聖画が宗教教育の

歴史の教会は常に

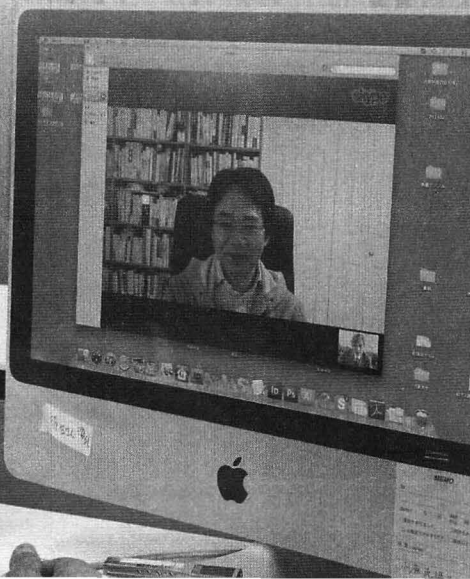
時代の先端メディアを利用

●インタビュー

小原克博氏に聞く

こはら かつひろ／同志社大学神学部教授

つながることとの大切さ、
切ることとの大切さ



聖画、出版、テレビ、ラジオ……教会はこれまでもさまざまなメディアを駆使して宣教に努めてきました。ネットも可能性の大きいツールです。

ただ、ネットには従来のメディアにない、強い同調圧力や吸引力があります。「つながること」と「切ること」、「全体」と「個」という、古くて新しい課題が再び問われる時代になりました。

役割を果たしました。カトリックの宣教師がやってきたとき、最初は十分な会話ができなかったのですね。そのとき彼らが用いたのが聖母像画でした。あのような美しい絵は当時の日本にはなかったもので、人々は驚いたのです。カトリックにとっては聖母像画は信仰の核心部分でもありましたから、宣教的な効果は大きかったです。

明治になってプロテスタントが入ってきたときには、文書伝道が活用されました。教会に行けばきれいな色刷りの聖句カードがもらえるなど、当時の若者にはとてもインパクトが大きくて、新しいメディアが教会につながるきっかけとなりました。このように時代の先端メディアを活用してきた歴史が教会にはあります。その伝統を受け継いで、大いにネットも利用していくべきだと私は考えています。

過剰なつながりを求める圧力

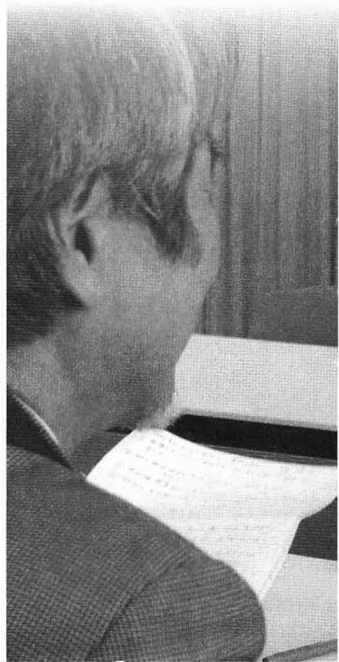
*社会的にはネットの功罪が論じられ、依存症などの危険性が指摘されます。教会のネット利用にも慎重な人がいます

ネットが従来のメディアと大きく異なる点は、生活への侵食力の強さ、影響力の強さだと思えます。それが既存のメディアと違う点です。デジタルネイティブ世代と言われる今の若者は、ネットがなければ友達ち関係を維持することも難しいと言われます。いくら親がダメだと言っても、携帯やスマホがなければ学校の人間関係の中に入っていくことができないこともあります。ですから、多くの親はやむなく買い与えています。しかし一旦手にすると、手放せなくなってしまう人が多くいます。ご飯を

食べているときもスマホをいじるようになります。メッセージが来る、それにすぐに返事を出さなければいけないとなると、勉強に集中することも難しくなります。

ネットは、人と人がつながるといことが魅力ですが、それが過剰になると問題にもなります。つながっているということが同調圧力として作用します。つまり、うま

インターネット電話で取材を受ける小原氏



フェイスブック [Facebook] 代表的なコミュニケーション・サイトの一つ。名前・顔写真・生年月日・勤務先・趣味・出身校といった個人情報や任意登録し、知り合いと気軽に交流したり、その個人情報を利用して同じ趣味を持つ人などとコミュニケーションをはかることができる。

ブログ [blog] 個人の日記などを簡便な方法で作成し、公開することができる。

ツイッター [Twitter] 不特定多数の人に向けて140字以内のツイート（つぶやき）を発信したり、また他の人のツイートを読むことができる。

く同調しなければ排除されるという息苦しさが、そこにはあります。皮肉なことに、人間を自由にするはずのものが、逆にどんどん縛っていく、拘束する方向へと作用してしまうのです。

つながることと、切ること

このようなネット社会の中でキリスト教のミッションとは何でしょうか。それは、「つながる」と同時に「切断する」、「全体」の一部であると同時に「個」として自立する、そのことではないかと思うのです。

確かに聖書も「つながる」ことの大切さを説いています。たとえばヨハネ15章に「わたしはまことのぶどうの木（1節）「わたし

につながっていないさい」（4節）とのイエスの言葉があります。つながっているなら、豊かな実を結ぶ、と教えます。

反面イエスは、つながりから脱していくことも強調しています。マタイ10章に「わたしが来たのは……平和ではなく、剣をもたらしために来たのだ」（34節）とあります。この時代、どこの地域でも家族とのつながりは大切です。それが、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない」（37節）とまで言い、既存の人間関係や社会秩序とのつながりをばつさり切るのです。

つまり、イエスは「つながる」ことの大切さと「切る」ことの大切さを述べているのです。それは、私たちがそもそも個人として何

者であるのかを考えさせ、「個」として立つことを促しているのだと思います。

宗教はこのように、本来「つなぐ力」と「切る力」の両方を持っていると思います。つまり、ネット社会においても宗教には語るべきことがあるということです。つながるだけで切る力を持たないと、ネットの海にのみ込まれてしまいますから。

「全体」と「個」という古くて新しいテーマ

*ネット社会と教会の信仰を論じているうちに、集団主義的日本社会とキリスト教という、古くて新しいテーマが浮かび上がってきました

そうですね。そこで教会がやらなければならないことは、圧倒的な侵食力を持つ取り返もうとするネットの力から人間を切り離し、個として立たせるといったことではないかと思えます。

教会はネットに乗り遅れている、だから一生懸命利用しましょうという発想だけでは、教会固有のミッションを見落としてしまふことになります。

横を見て、周りを見て、そこから、はみださないようにするという心理がネットで

内容が豊富な小原氏のホームページ



婦人之友 創刊111年

2月号 1月12日発売 定価710円

【座談会】**家事がしやすい置き場所**
 ●子育て・家事・在宅ワークがつながる家
 ●(連載)井田典子さんの「整理整頓」訪問Vol.2

【特集】**二丁の豆腐(上) 味・価格・材料その違いはなぜ?**
 ●遺伝子組み換え食品を知ろう
 鈴木宣弘(農業経済学)／安田節子(食生活19!)／林重孝(農業)

【今日のいのり】**神様は、生きて 香月茂**
 上野動物園いまむかし 正田陽一／冬の皮膚トラブル

あす 明日の友

創刊40周年 中高年の生活と健康を考える

207号 冬 好評発売中! 定価630円

【健康特集】**高齢者に増える「便秘の悩み」**
 排便のしくみ/自分でできる解消法/便秘薬
 神山剛(亀田京橋クリニック診療部長)

【生活特集】**安心をのこす 遺言・相続**
 遺言のすすめ/相続税がかかるのは?
 加藤幸子(作家)／岡田朝雄(ドイツ文学者)

【対談】**年を重ねることの価値 自然とヘルマン・ヘッセの言葉**
 書類・年賀状・写真の保管と処分/在宅介護の費用/小さき者へのまなざし(ローマ教皇の教え) H・ホアン

ご希望の方は、電話、FAX、ハガキ、ホームページからご注文ください。誌代後払いでお送りいたします。(定価税込)

婦人之友社
 〒171-8510 東京都豊島区西池袋2-20-16
 電話 03-3971-0102 FAX 03-3982-8958
 ホームページ <http://www.fujinnotomo.co.jp/>

増幅されています。十九世紀以降、プロテスタントが日本に入ってきたときに浮かび上がったテーマもまさにそのことでした。ネット社会になっても、その「村社会」的メンタリティーが形を変えて連綿と受け継がれているということでしょうか。「全体」と「個」という、日本宣教における未完の課題が再び先鋭的に問われる時代になったと思います。

十九世紀から二十世紀の前半にかけて、全体主義に個がのみ込まれていきました。そのようなときにキリスト教社会主義の運動が精彩を放ったように、今、再び全体主義に傾きつつある日本の中で、さらにネットの同調圧力の中で、個として自立するということメッセージは時代を超えて必要なもの

だと思えます。

切れ目のなくなつた生活

また、影響が生活の隅々にまで二十四時間遍及ぶという点でもネットは特異です。たとえば、ネット社会以前では、学校で何かあつても家に帰れば家の顔でいられました。ところが今はその境界がなくなつてしまい、いつまでも、どこに行つても教室の人間関係を引きずらざるをえません。これはつらいことです。この切れ目のなさが日常を覆い、オン・オフの使い分けを難しくさせているように思います。

それは、聖書的なキーワードで言うとう、安息日問題とつながります。人間は、古代であれ現代であれ、働かなければ生きてい

けません。ところが、切れ目なく働き続けると、大切なことを忘れてしまうのです。たとえば、神さまのことを忘れてしまします。救われたことも忘れてしまします。

一週間のうち、六日働いたら一日休んで神さまのことを考え礼拝するということは、ユダヤ教からキリスト教が受け継いだ大事なことです。切れ目のない時間に、意図的に切れ目を入れるのが安息日です。強制的に日常から距離を置く安息日の時間を入れることによって、過ぎた一週間のことを考えるわけです。こうした知恵はネット時代の今こそ意識して持つ必要があると思うのです。

フェイスブックやツイッターなどで大量の個人情報が絶え間なく交換されています。

お互いをよく知るといふ意味ではポジティブな面を持っていますが、切れ目なく、常に誰かとつながっていないければ不安だという依存症も引き起こしています。また、常にネットの方に心が向きますので、何かに集中するということができません。読書に集中したり、思考を集中させることが難しくなっているのも大きな問題です。

膝と膝を突き合わせた人間関係作り

ネットのマイナスイ面を指摘しましたが、最初に述べたとおり、教会は時代のメディアを積極的に活用してきましたし、問題はあってもネットはますます広がっていくと思います。そのネットを活用して教会の働きを進めていく努力は絶対に必要だと思えます。

しかし、よくホームページを作つてそれで終わりにしている教会がありますが、ホームページは最初の一步に過ぎません。ネットが自動的に教会の外と内をつなげてくれるわけではないのです。ネットで見ても関心を持ってもらう中味がなければなりませんし、閲覧者との関係を継続する努力も必要です。魅力的な活動がなければ実際に

教会に「行つてみよう」と思つてももらえません。

時に、「ネットなんかで福音が伝わるか」と言う人がいますが、これは大事な直感も含んでいると思います。多くの人が福音に出会つたのは、一対一の関係の中ではないでしょう。信頼する友人に誘われてとか、魅力的な牧師と出会つて膝を交えて信仰について語り合つた原点が、人それぞれにあります。その原点があるからこそ、数十年経つた今も信仰を続けていることができたのではないのでしょうか。

イエスと弟子たちとの関係もまさにそれでした。弟子たちの記憶に残つたのは、イエスと共にした親密な食卓の経験であり、弟子たちだけの場でイエスが話された教えであつたりしました。食事をする、パンを分かち合う、個人と個人が膝と膝を交えて語り合う、その記憶が絶対あるのです。ネットがどんなに発達してもそれは他のもので代用できない経験です。デジタル時代とはいえ、ないがしろにしてはならないと思うのです。

ネット教会の可能性

*ネット教会というものはあり得るでしょうか

私はそれはあり得ると思つています。実はそれは新しいことではないんですね。内村鑑三が目ざしました。彼は、「レンガやコンクリートでできた教会はもういらぬ。信仰で結ばれた教会こそ必要だ」ということで、聖書研究を中心にした信仰雑誌によつて全国の信徒をつなげようとしたのです。いわゆる、バーチャルな「紙上の教会」を作ろうとしたわけです。

彼が用いたのは雑誌でしたが、発想としてはネット教会と同じです。その意味でも内村は先駆的な人だつたと思います。しかしこの考えは内村だけのものではありません。よく考えると、歴史の教会自体が古くから、個々の「見える教会」と普遍的な「見えない教会」という考え方を持っていました。教会は確かに建物や組織ですが、信仰的には見えない普遍的な「キリストの体」が存在する、と考えられてきました。つまり、リアルな教会とバーチャルな教会の両面を私たちは初代教会からずっと考えてきたわけです。そのように考えると、ネット教会というのも神学的には十分考えられることです。

*今日はありがとうございました。